

高田時雄著

〔東洋學叢書〕

敦煌資料による中國語史の研究

——九・十世紀の河西方言——

刊行 創 文 社

高田 時雄 (たかた・ときお)

1949年大阪市に生まれる。1972年京都大學文學部卒業。1976-80年、佛國國立社會科學高等研究院に學ぶ。歸國後、小樽商科學助教授を経て、現在京都大學助教授。[主要論文]「ウイグル字音考」、「コータン文書中の漢語語彙」。

〔敦煌資料による中國語史の研究〕

昭和六三年二月二五日 第一刷印刷
昭和六三年二月二八日 第一刷發行

定價八五〇〇圓

著 者 高 田 時 雄

發行者 久保井 理津男

東京都千代田區一番町一七一三

印刷者 中 内 康 兒

東京都文京區關口一―二四―八



發行所

東京都千代田區
一番町一七番地

株式會社

創 文 社

〒102 電話東京二六三―七〇一(代表)
振替東京二一九二四七二

(落丁・亂丁はおとりかえいたします)

曉印刷・鈴木製本

3322-192330-4226

目 次

凡 例	v
-----------	---

第一章 序 説

第一節 九・十世紀河西の歴史情勢と河西方言	5
第二節 河西方言研究小史	10

第二章 資料の解説

第一節 藏漢對音資料	17
1 千字文 C (P.t. 1046)	20
2 金剛經 K India Office C129	22
3 阿彌陀經 O India Office C130 (Ch. 77, ii, 3)	23
4 大乘中宗見解 T India Office C93 (Ch. 80, xi)	28
5 天地八陽神呪經 TD (P.t. 1258)	29
6 法華經普門品 (觀音經) FP (P.t. 1239)	31
7 南天竺國菩提達磨禪師觀門 NT (P.t. 1228)	31
8 道安法師念佛讚 DA (P.t. 1253)	32
9 般若波羅蜜多心經 P (P.t. 448)	32
10 法華經普門品 (觀音經) FPa (P.t. 1262)	33
11 寒食篇 HS (P.t. 1230)	33
12 雜抄 ZC (P.t. 1238)	34
13 九九表 99 (P.t. 1256)	34
14 唐蕃會盟碑	34

第二節 コータン文字轉寫資料

金剛經 Kbr (India Office C134)	38
-----------------------------------	----

第三節 音注資料

1 開蒙要訓 P. ch. 2578	41
2 諸雜難字 P. ch. 3109	42

3 難字音注（假題） S. 840	42
4 佛書音注（假題） P. ch. 2271	42
5 難字音注（假題） P. ch. 3270	43
第四節 その他の資料	44
1 敦煌寫本中に見える別字，異文	44
2 ソグド文字で書かれた漢語數詞 P.t. 1895A, V ^o + P.t. 1689, V ^o	45

第三章 音 韻

第一節 聲 母	49
0 切韻及び唐代の聲母體系	49
1 無聲無氣音の系列：見，端，幫，知，精，章，莊母	51
2 無聲出氣音の系列：溪，透，滂，徹，清，昌，初母	64
3 有聲音の系列：群，定，竝，澄，從，船，崇母	69
（附）齒音二・三等及び舌上音の區別について	76
4 喉音：曉母，匣母	79
5 齒音摩擦音1：心母，邪母	81
6 齒音摩擦音2：書母，生母，禪母	83
7 鼻音：疑母，泥母，孃母，明母	86
8 輕脣音：非母，敷母，奉母，微母	94
9 來母	99
10 日母	100
11 影母，喻母三・四等（云・以）	102
12 河西方言の聲母體系	107

第二節 韻 母	110
0 切韻及び慧琳音義の韻母體系	110
1 果假攝	112
2 遇 攝	115
3 蟹 攝	119
4 止 攝	126
（附）重紐の反映	132
5 效 攝	140

6	流 攝	143
7	咸 攝	145
8	深 攝	148
9	山 攝	149
10	臻 攝	157
11	宕 攝	160
12	江 攝	164
13	曾 攝	166
14	梗 攝	167
	(附) -i を -u で寫すことについて	172
15	通 攝	175
16	河西方言の韻母體系	179
第三節 聲 調		182
第四節 河西方言の性格と現代西北方言		186
第四章 語 法		
第一節 資 料		195
1	藏漢對譯語彙文例集 (S2736, S1000, S5212)	195
2	コータン・漢對譯文例集 (S5212, Or8212.162, P2927)	197
第二節 語法概要		228
1	人稱代名詞	228
2	疑問詞	232
3	接尾辭	235
4	句末助詞	235
5	否定辭	239
6	反復疑問文	239
7	禁止構文	240
8	詞 序	241
	(附) 河西方言語彙索引	242

附録一 資料の轉寫テキスト	247
1 千字文 C	247
2 金剛經 K	250
3 阿彌陀經 O	254
4 大乘中宗見解 T	261
5 天地八陽神呪經 TD	270
6 法華經普門品 FP	282
7 南天竺國菩提達磨禪師觀門 NT	283
8 道安法師念佛讚 DA	288
9 般若波羅蜜多心經 P	291
10 法華經普門品（音注本）FPa	292
11 寒食篇 HS	293
12 雜抄 ZS	293
13 九九表 99	293
14 唐蕃會盟碑	294
附録二 「開蒙要訓」音注通用表	298
1 聲母通用表	298
2 韻母通用表	301
附録三 資料對音表	303
附録四 資料寫眞	424
引用文獻目録	439
あとがき	449
索引	451

敦煌資料による中國語史の研究

——九・十世紀の河西方言——

第一章

序 說

第一節 九・十世紀河西の歴史情勢と河西方言

中國本土から西域への交通路であるいわゆる河西回廊は安史の亂（755-763）以後次第に新興の吐蕃の支配下に置かれることとなった。河西回廊に点在するオアシス都市が陥落していった時期にはそれぞれにかなりの違いが見られるが、最も遅くまで抵抗を續けたとされる沙州（敦煌）の陥落は787年のことであった¹⁾。處によっては百年ちかきに及ぶ吐蕃支配ののち河西地方が再び漢人の手に歸るのは沙州の土豪張議潮が叛亂によって吐蕃を驅逐した大中二年（848）までまたねばならなかった。張議潮は河西を回復した功績によって唐王朝から歸義軍節度使の稱を授けられ實質的な河西の支配者となった。張氏歸義軍はこの頃モンゴリア高原を逐われて河西に入り込みつつあったウイグルの一派を攻撃するなど軍事的にもかなり強力な存在であったらしい。しかし張氏歸義軍の時代はさほど長くは續かず、短い西漢金山國の時代を経て914-920頃には曹氏にとってかわられることになる。曹氏も張氏と同じように歸義軍節度使に拜せられて政權を維持しつつ宋代に及んだ。ただ曹氏歸義軍の支配する領域は張氏時代とは異なり沙瓜二州に過ぎず、そのころ甘州に據っていた甘州ウイグル王國や西方のコータン王國と姻戚関係を結びつつ外交によって辛うじて國を立てて行くといった小王國であった。この次第に傾きのみられる漢人王國にとってより切迫した脅威になっていったのはおそらくウイグル人の浸透であったと思われる。ウイグル人は甘州以外にもトルファン盆地に大きな根據地を持っており、彼らは次第に沙州の漢人王國を併呑する勢いを示してきたものであるらしい。というのは十一世紀前半

1) 敦煌の陥落年代については諸説がある。藤枝晃氏は781年とし、ドミエヴィル、饒宗頤氏などは787年とする。いま後者を取る。藤枝（1961）p. 199, Demiéville（1952）pp. 176-7, 饒（1971）pp. 1-10. また近年786年とする山口瑞鳳氏の説があることを付記する。山口（1980）pp. 197-8.

になると曹氏歸義軍は沙州ウイグルを稱しはじめるからである。この呼稱は沙州におけるウイグル人の大きな勢力を想定しなければ理解しにくい。1036年になると沙州は西夏に攻略されてその版圖に入るが、その以前に既に漢人の勢力はこの地方から次第に弱まっていく傾向にあったのである¹⁾。

以上は八世紀後半から十一世紀前半までの沙州を中心とする河西の歴史情勢の概略である。このような情勢のもとで河西の漢語方言はどういった状況にあったであろうか。先ず長期にわたるチベット支配が相當に大きな影響を及ぼしたことは容易に想像される。「新五代史」は文宗（827-840在位）の頃のこととして次のように傳えている：

「安祿山之亂，肅宗起靈武，悉召河西兵赴難，而吐蕃乘虛攻陷河西，隴右，華人百萬皆陷于虜。文宗時，嘗遣使者至西域，見甘，涼，瓜，沙等州城邑如故，而陷虜之人見唐使者，夾道迎呼，涕泣曰：「皇帝猶念陷蕃人民否？」其人皆天寶時陷虜者子孫，其語言稍變，而衣服猶不改²⁾。」

ここに言う言語變化が実際にはどういった種類の變化であったかを正確にいい當てることはなかなか困難であるが、少なくとも次のようなことを考えてもよいと思われる。第一にはチベット語の直接的な影響であって、チベット支配の下にチベット語を習い覚えた漢人が漢語を喋るときにもチベット語を交えるといったようなことである。これを指して「其語言稍變」といったことは考えられる。もう一つの可能性はチベット支配の言語に及ぼした直接の影響ではなく、漢語の規範意識に對する影響である。従ってこれは社會的影響といってもよい。チベット支配期以前においては、河西も唐王朝の整備された行政機構の下にあってほとんど本土と変わるところのない状況に在った筈であるが、言語に就いてみても當時の標準語とされるものが規範として大きな拘束力をもっていたと考えられる。詩文の押韻や佛經の讀誦も標準音によることが正しいとされたであろう。しかし長期の異民族支配の結果、こういった規範意識は揺らいで稀薄になっていったと思われる。規範意識が薄らぐのと相呼應して浮上してくるのは當然ながら本來の土着の方言であろう。

1) 以上の記述は主として以下の論文によっている。藤枝（1941-43）、森安（1980）。

2) 新五代史卷七十四，四夷附錄第三，吐蕃（標點本 p. 914）。

この土着方言の顕在化を中央の使者は「其語言稍變」と見なしたということもまた有り得るとせねばならないと思う。これはチベットの支配を脱した後の歸義軍期になってからも同じで一度失われた規範意識は再び十全に回復されることがなかった。中央の王朝を宗主と仰ぎつつも実際には獨立國であった歸義軍時代に有力になっていった言語は土着の方言であったと考えられる。曹氏歸義軍時代には上述のように近隣諸國との交渉がとくに頻繁であったが、この際に用いられた言語もやはりこの方言であったと考えざるを得ない。我々はこの方言を河西方言と呼びたいと思う。

河西方言という呼稱に對しては或は異論があるかもしれない。なぜ西北方言というより使いならされた言い方をしないのか。それは西北方言というのは現代の方言區分を襲用したものであって、それを無批判に千年以上昔の時代に當てはめただけのものだからである。現代の北方話の下位區分としての西北方言は山西、陝西、甘肅、寧夏から河北、青海、內蒙古の一部に及んでいるが¹⁾、千年以前においても同じ分布を示していた證據は何もない。それに我々の研究對象である方言が今日の西北方言の前身であるということがどうして言えるであろうか。それが現代西北方言との比較において、兩者に明らかな類似が認められるからだと言うならば、我々は、その類似の部分よりも一層多くの、そして本質的な差異を兩者の間に見いだすのである。我々はこういった比較には悲觀的にならざるを得ない。先に見たように、敦煌を中心とする地方は十一世紀初頭からウイグル人の強力な浸透にあい、さらにはチベット系のタングートを支配民族とする西夏國の版圖の中に埋没してしまう。また十四世紀後半、明代になると、酒泉（肅州）の西にある嘉峪關がその西境と定められ、敦煌は名實ともに中國の境域外に置かれることとなる。かくして次第に、この土地はイスラム化したトルコ系住民の居住區となってゆく。史上にいうトルキスタン化である。ここに漢人が再び生活の場を見いだすのは清朝になってからであり、それは新たな植民によってであった。こういう歴史的變遷を経た結果として、河西方言は直接の子孫を現代の方言に持っていないと考えられる。それは歴史の中に亡び去った方言なのである。今日の

1) 『漢語方言概要』p. 24.

敦煌住民の言語は、清朝以後の内地からの植民と共にもたらされたものであることは確實である。

また使用する資料がすべて敦煌出土のものであることからすれば、なぜ單刀直入に敦煌方言としないかという議論もあると思われる。しかしチベット支配期はいうまでもなく、歸義軍期でさえもその領域は敦煌に限られなかったのであって、敦煌方言と呼ぶとすれば狭く限り過ぎる嫌いがあることを否定できない。また沙瓜二州にしか支配のおよばなかった曹氏歸義軍でさえも河西節度使を名乗っていることを考慮すれば、この河西方言という呼稱は決して見當外れとは言えないであろう。

この様な意味での河西方言にたいしてチベット支配期以前には河西でも標準語が流通していたであろうことは上に述べた。強い中央集權的な國家支配の下にあるとき、標準語が邊境に至るまで極めて強い普及力を發揮するのは至極當然のことである。先に述べたこととやや抵觸するようであるがこの標準語に近いであろうと思われる形式が我々の資料の内のより古いもののなかにはなお見られる。これらは河西における唐の支配の言語的殘存形であるといえる。もちろん十世紀に入ると河西方言が次第に有力となり、標準語的な形は急速に影を潛めてゆくこととなる。

ただしこの標準語的な形式はあくまで標準語的なものであって標準語そのものと全く同じなのではない。それはしばしば自らの方言の影響によって變形された。このことは例えばラサにあるかの唐蕃會盟碑に用いられたチベット文字轉寫と、我々の藏漢對音資料中の標準語的な形を示すものとを比較してみるならばよく理解される。敦煌出土資料に標準語的なものがあるとはいっても、やはりそこには河西方言的色彩を否定しがたい。したがってこの標準語的な言語は河西人の意圖する標準語であり、河西方言的に變形された標準語である。この言語が河西的な特徴を示す限りに於て、より純粋な河西方言とともにこれを本書の對象として取り扱うことになる。

関連年表

787	沙州（敦煌）吐蕃に占領さる
822	ラサにおける唐蕃會盟
840	ウイグル、モンゴリアを逐われて西遷す
848	張議潮（872 死）河西を吐蕃より回復（歸義軍節度使）
890頃	甘州にウイグル王國成立
907	唐王朝滅ぶ
914-920	この頃曹氏、張氏より政權を奪取（曹氏歸義軍）
1014	「沙州ウイグル」出現
1036	西夏、沙・瓜・肅州を攻略

第二節 河西方言研究小史

二十世紀初頭、各國の探検隊が東トルキスタンからさまざまな言語で書かれた古文書を相次いで學界にもたらし、これらの文書の研究が活潑に行われるようになった當初から、そこに現れる漢語音形の特異性に注意が向けられた。1912年、P. ペリオ氏は Qocho という地名を漢語の高昌に比定しようとする論文の中で、當時既に F. W. K. ミューラー氏によって研究公刊されていたトルファン出土のウイグル文書やマニ文字によって書かれたソグド語のカレンダー、それに自らが敦煌からもたらしたチベット文字による漢字轉寫を参照しつつ唐代の中央アジアに行われた漢語ではその -ng 韻尾が脱落することを指摘している¹⁾。その後 H. マスペロ氏はその「唐代長安方言考」に上述の資料、とりわけペリオ將來の藏漢對音千字文をやや組織的に使用したが、それは河西方言ではなく長安方言の資料としてであった²⁾。

一方藏漢對音資料の公刊は20年代以降着實に進み、先ず千字文の斷簡がわが國の羽田亨氏によって一部の寫眞と共に發表された³⁾。この千字文は漢字テキストの傍らにチベット文字による音注を付けたものであるが、漢字がなくすべてチベット文字で書かれた資料が英國の F. W. トマスと G. L. M. クローソン兩氏によってやや遅れて相次ぎ發表された。それは羅什譯の「金剛經」及び「阿彌陀經」のそれぞれ一部分であった⁴⁾。そもそも漢字以外の文字で書かれた漢文テキストを解讀することは極めて困難なことであって、これを成し遂げた彼らの業績は高く評價されるべきである。これによって藏漢

1) Pelliot (1912)

2) Maspero (1920)

3) 羽田 (1923)、千字文の全部の寫眞は後にペリオとの共編のかたちで出版された『敦煌遺書』第一集の中に収められた。

4) Thomas & Clauson (1926), (1927)